

イギリスに暮らす



エッセイスト
長井 那智子さん

「やはり私にはイギリス文学しかない!」と連載を始めました」

ええ、まあ(笑)。今回出版した本は、連載されたエッセイを書籍用に加筆、修正したものです。イギリス小説60編を選んでゆかりの地を訪ね歩いた記録です。思いがけず「日本図書館協会選定図書」に選ばれて、おかげさまで現在、国会図書館はじめ都道府県の図書館、また多くの大学図書館等にも置かれています。表紙絵に訳本「ハリー・ポッター」シリーズで人気の画家ダン・シュレンジンジャーさんの作品を使わせて頂きました。ダンさんは私たちがイギリスに在住していた当時、同じリッチモンドにお住まいで我が家にもいらしたことがあり、掲載を快く承諾して下さいました。

きない場所はそれまでに読み貯めた本と集めた資料から、充分に旅行計画を練つてなるべく無駄のないように回りまわした。6年間近くかかって地道に書き貯めたものなので努力だけはしたと自己満足しています。掲載されている写真も全部私が写しました。

●取材時に印象に残ったエピソードがありましたら教えてください。

私は作家のお墓参りが趣味なんです。特別印象的だったのは、テムズ川沿いの小さな村、サットン・コートニーにあるジョージ・オーウェルのお墓でした。糸杉に囲まれたライムストーンの古い教会、その真庭に作家は眠っています。墓石には、Here Lies Eric Arthur Bl... にも綺麗な彫刻が施されています。

「ハリー・ポッター」のキングズクロス駅9と3/4番線ホーム「秘密の花園」の作者が暮らした「グレイトサム・ホルの花園」などなど、エッセイスト・長井那智子さんの著書「チップス先生の贈り物」には、イギリス文学作品ゆかりの地がたくさん収められています。実は長井さんは2000年から06年までイギリスに在住していました。長井さんに著書について伺いました。

●「チップス先生の贈り物」は、ご主人の転動に伴いイギリスに転居されて2006年にご帰国されるまでに書き溜められたエッセイを再編集して出版されたと同じく、エッセイを執筆された契機を教えてください。

私はもともとと文学作品を「読んだりモノを書くことが好き」だったのでイギリスへ来て半年ほどたつた頃、2001年のはじめに父の友人を紹介してインターネット雑誌「ベストライフ・オンライン」からエッセイの依頼を受けたのが始まりです。編集部から「テーマはイギリスのことなら何でもいいですよ」と言われましたが、イギリスに関するエッセイはたくさんの方がこれまで書いていますし、引き受けたものどつしものかど、それで色々考えた結果「やはり私にはイギリス文学しかない」という結論に達して、作品ゆかりの地を探索するというエッセイの連載を開始しました。

●ある意味、文学を通してイギリスを描いたわけですね。

長井さんのおすすめ

イギリス人の「自叙伝」

私のまわりにも自分史を書こうという方が増えているので、素敵な自叙伝をお薦めしたいと思います。ひとつはハドソンの「はるかな国・お国」です。少年時代の思い出を綴ったもので、南米の自然が美しい文章で描かれています。ハドソンは100年も前に滅びゆく熱帯雨林を予測したような小説「緑の館」を書いた作家です。もうひとつは「アガサ・クリスティー自伝」です。ふたつの大戦の時代を生きたイギリス淑女の自叙伝です。頑固なほど自己を保ちながら、表面は優しく人見知り...こんな素敵な女性がいるのでしょうか。ミステリ作家として有名な人ですが、この本を読むとまた違った面を見出すことができるでしょう。



イギリスの「童話」

イギリスの童話をぜひ読んで欲しいと思います。小さなお子さんの方には子どもに読み聞かせるということも大切なことでしょう。「ナルニア国物語」「指輪物語」「秘密の花園」もう少し小さな子どもたちのためには「たのしい川べ」「ピーターパン」や「メアリー・ポピンズ」、もっと小さな子どもたちのためにご存知の「ピーターラビット」や「くまのプーさん」など。何度も何度も読み返すうちに単純なストーリーのなかにとても意味の深い人生の指針のようなものが見えてくると思います。



映画「日の名残り」

とても地味な映画で初めて見たときはあまり印象に残らなかったのですが、数回見るうちに心に深く沁みてきました。言い尽くせない万感の思いが感じられて、とてもイギリス的だと思います。映画が撮影されたディラム・パークにも行きました。この原作はカズオ・イシグロ、日本人の遺伝子を持つイギリス人というところも興味深いですね。



●本ではイギリス各地に点在している場所を紹介されています。取材も大変だったのでは?

おっしゃる通りです。連載当初はロンドン周辺だけで大丈夫だと高をくくっていたんですが、色々調べていくうちに予想に反してほとんど取材エリアが広がって、はつきり数えてはいませんが、200ヶ所くらいは訪ねたと思います。大変でしたがその反面、楽しくもありました。取材方法は小説を一冊読み終えるごとに、その背景や作者の生い立ちゆかりの地など、資料を丁寧に調べてまとめておきます。ロンドン市内は気が向いたときに歩きましたが、日帰りで

緑の丘陵に石灰の白い線が走るアフィントン村にある白い馬の丘。



写真(下) プリンスタウン・旧ダッチーホテルのシャーロック・ホームズ像



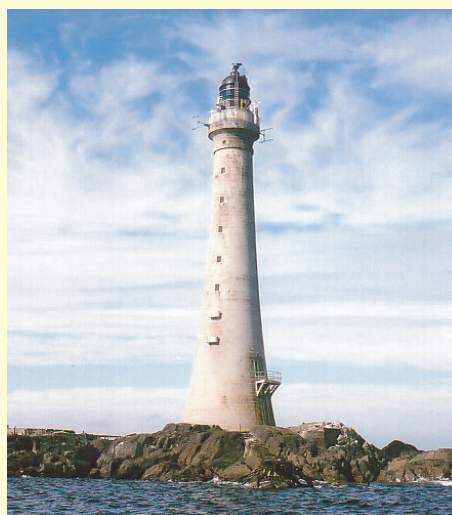
「お墓の燃えるような赤い野ばらに釘付けに」

●取材を通じて本のタイトル通り、長井さんも贈り物を授かったのでは？

取材旅行での様々な出会いは、貴重な体験でしたね。それから本で紹介している60編の中には初めて読んだものもありましたが、大半はかつて読んだものだったんです。

それらを取材のために読み返してみたとき、昔、初めて触れたときは違った小説の世界観が見えてきたり、そのときは理解できなかったことが判読できたりしましたね。

これは自分が歳を重ねたことと、イギリス文学を実際にイギリスで読んだことからきた



世界で一番美しいと絶賛されるスケリヴォア灯台。

理解力なのかもしれません。
●イギリスを回られて、ご自身が気に入られた場所はどこですか？

本の「太陽の馬・月の馬」の章にも書きましたが、イギリスで一番好きな場所はどこかとよく人に聞かれます。その度に私はロンドン郊外のアフィントン村にある白い馬の丘と答えます。草の中に座って遠い地平線を眺めていると心が開放されて本当に気持ちがいいんです。丘の斜面には石灰質の地面を掘り下げた大きな白い馬の絵が描かれていて、いかにも古代信仰の丘といった風情です。イギリスは海も綺麗ですね。特にスコットランドの海。メンデルスゾーンの交響曲「スコットランド」のイメージそのままの海です。海上には18世紀から20世紀にかけて建造された灯台が、たくさん残っていて今でも使



映画「日の名残り」が撮影されたディラム・パーク。

われています。「ジキル博士とハイド氏」の作者ステイヴンソンは、有名な灯台技術者の家系に生まれました。一族の建造した灯台のなかのひとつ、世界で一番美しいと絶賛されるスケリヴォア灯台を見に行きました。これも「ジキル博士とハイド氏」の章に書いたのですが、北の荒海黒い岩礁、白い灯台・素晴らしい風景でした。それから海辺の町もいいですね。ヴィクトリア時代に開発された古い海水浴

場は、今でも独特の雰囲気を保っています。海辺の町で多くの芸術家が誕生し、傑作が作られました。イギリス人にとって海は憧れや希望の象徴、私たち日本人と相通するところがあるのかもしれない。

プス先生の贈り物に掲載された写真をカラーで見たいと言ってくださる方が多かったので、ホームページに掲載しました。是非見てください。次から次にイギリスの小説タイトルが長井さんから飛び出しました。1週間に2、3冊は本を読み、夢の中にヴァージニアウルフが出て来るほど文学を愛する長井さんは、現在イギリスの本を翻訳中とか。次回作も期待しています。

長井 那智子(ながい なちこ)さん

東京都生まれ。1982年よりスペインに6年、95年よりオーストラリアに4年、2000年よりイギリスに6年在住。インターネット雑誌「ベストライフ・オンライン」に本で読む名画・名舞台」を連載中。またカルチャーセンターで手彫りガラス工芸の講師も務める。

長井さんのウェブサイト

<http://homepage2.nifty.com/natty-web/>

「チップス先生の贈り物」はJP-Booksで購入できます。

JP-Books (ロンドン三越内)

Dorland House,
14-20 Regent Street,
London SW1Y 4PH

TEL: 020 7839 4839

「チップス先生の贈り物」(春風社)

